

(3) グループ・アプローチを取り入れた「居場所づくり」「絆づくり」の取組

グループ・アプローチとは、「参加するメンバーの教育・成長をめざした、グループ、集団での生活体験のこと（國分・國分, 2004）」です。各種グループ・アプローチのうち、構成的グループ・エンカウンター（S G E）、ソーシャル・スキル・トレーニング（S S T）などは、学校教育にも多く取り入れて来られました。共同研究校においても、グループ・アプローチを積極的に取り入れながら、生徒の「居場所づくり」「絆づくり」を図りました。

① 共同研究校による合同研修

講師を招聘し、共同研究校による合同研修を行いました。

・第1回

期 日 平成29年8月28日（月）

講 師 神戸親和女子大学 金山 健一 教授

内 容 「明日からすぐ使えるマルチレベルアプローチで不登校対策」

・第2回

期 日 平成30年8月24日（金）

講 師 立命館大学大学院教職研究科 菱田 準子 教授

内 容 「一人一人が幸福を創りだす子どもに育てるために
～Well-Beingとピア・サポート～」

・第3回

期 日 令和元年8月28日（水）

講 師 神戸親和女子大学

長谷川 重和 教授

内 容 「学級における絆づくり
～教育的グループワークによる人間関係づくり～」



合同研修会の様子

② やまびこおしゃべりすごろく

各共同研究校において、金山健一教授が考案された教材をもとに但馬やまびこの郷で作成した「やまびこおしゃべりすごろく（図9）」を活用した絆づくりに取り組みました。すごろくの質問に答えながら自己開示することは、自己理解や他者理解に繋がり、学校における好ましい人間関係を構築することができると考えられます。また、各学期始めに取り組むことにより、対人関係の不安を軽減することもでき、更なる効果が期待できると考えました。

C中学校1年生では、学年の始めに実施しました。活動中、全ての生徒が積極的に参加する姿が見られ、事後のアンケートにおいても、「楽しかった」「安心して参加できた」「協力してできた」「緊張がとけた」など、肯定的な回答が多く見られました。

図9 やまびこおしゃべりすごろく

③ アドジャンジャンケン

D中学校1年生は、2学期の始めに、長谷川重和教授に紹介していただいた「アドジャンジャンケン」に取り組みました。「アドジャンジャンケン」とは、「アドジャン」というかけ声で、全員が0から5までの数を指で示し、その数を合計し、ワークシート(図10)にある同じ番号(10以上は1の位の数)の質問に全員が答えるというゲームです。1学期の始めと比べて学級の雰囲気にも慣れたためか、全ての生徒が安心して活動に参加していました。さらに、自分たちでジャンケンの振り付けを考えたり、質問項目を増やしたりするなど、主体的に活動する姿も見られました。事後のアンケートにおいても、「友だちのことに興味がもてた」「友だとのかかわりが増えた」「友だちの良さに気づくことができた」など、他の子との繋がりを意識した回答が多く見られました。

グループ・アプローチに取り組んだ教職員からは、「ゲームとして自分のことを表現でき、心を開くきっかけとなった」「お互いのことを改めて知る良い機会となった」「一気に生徒同士の緊張が解れた。今後も席替のタイミングなどで活用したい」などの意見が聞かれました。定期的な取組により、「絆づくり(全ての生徒が主体的に取り組む活動を通して、互いが認め合える場面を実現すること)」が、さらに高まると考えられます。

アドジャンジャンケンシート

- 1 あまり時間をかけて、答えすぎなくていいよ。
- 2 3秒以内で言えたら、すごい!
- 3 (8, 9, 0番)は自分たちで考えて書きましょう。

番 号	質 問(聞きたいこと)
1	好きな食べ物は何ですか？
2	外国旅行をするならどこに行きたいですか？
3	好きな動物は何ですか？
4	一番ほしいものは何ですか？
5	好きな色は何ですか？
6	休みに何をしていることが多いですか？
7	趣味(興味があること)は何ですか？
8	
9	
0	

図10 アドジャンジャンケンのワークシート



グループ・アプローチに取り組む生徒の様子

4 まとめ

平成29年度より、新たな不登校を出さない「不登校の未然防止」について調査研究事業に取り組んできました。

共同研究校には、特定の学年に不登校が多い、家庭環境に問題があるなど、それぞれの課題があり、不登校が起こる背景も異なっていました。しかし、異なる状況にもかかわらず、平成30年度の不登校の割合は、4校中3校の中学校において、兵庫県公立中学校平均（4.30%）及び全国公立中学校平均（3.18%）を下回っていました。これを可能としたのは、全ての生徒が、「学校に行きたい」「学校が楽しい」と感じるために、全ての教職員が一丸となり「居場所づくり」と「絆づくり」を意識した学校・学級づくりに取り組んだ結果だと考えます。

意識調査にもとづくR-P D C Aサイクルの実践では、自分たちの取組が全ての生徒に届いているのかを点検し、その後の取組を定期的に見直しながら、不登校の未然防止に取り組みました。中には、教職員の献身的な取組にもかかわらず、意識調査の数値が低かったり下がったりするケースもありましたが、全ての教職員で課題を分析して、今後の対策を協議することにより、共通の目標をもって日々の実践に活かすことができました。ある中学校では、「みんなで何かをするのは楽しい」を取組目標として実践してきましたが、2学期末の数値が下がりました。結果から、「2学期には大きな行事が多く、数値が増えることを期待していたが、運動や音楽が苦手であったり、他学年を含めた集団が苦手であったりする生徒がいたのかもしれない」と考察し、3学期からは日々の授業の充実を目標に取り組むことにしました。意識調査がなければ、大きな行事だけに目が向く、一人一人の生徒の気持ちに向き合うことができなかつたかもしれません。この取組について、教職員からは、「生徒の気持ちを知る良い機会となった」「結果を見ると、何とかしようという思いになる」「シンプルで分かりやすく生徒も答えやすい。そのため点検もしやすく、取組目標も明確になる」という感想が聞かれました。また、「他の教職員の意見やアドバイスを聞くことができ参考になった」「課題が共有でき、共通の目標に向けて取り組むことができた」など、教職員の協働性の高まりが感じられる感想もありました。

不登校の未然防止は、生徒の実態把握に始まり、生徒の気持ちにしっかりと寄り添って、全ての教職員で共通理解しながら、普段から意識して取り組むことが大切です。今回の調査研究により、そのことが改めて確認されました。但馬やまびこの郷を利用する児童生徒の多くが、学校での居場所を失い、傷ついた心を抱いた状態でやって来ます。彼らにとって学校は、決して楽しい場所であるとは言えません。中には「未然に防ぐことができたのでは…」と思われるケースもあります。今後も各学校において、不登校の未然防止に取り組んでいただき、一人でも多くの児童生徒が笑顔で登校できればと願います。

最後になりましたが、調査研究の実施及び本報告書の作成にあたり、並々ならぬご理解とご尽力をいただきました関係者の皆様に対して、深く感謝申し上げます。

〈参考文献・参考資料〉

- ・長谷川 重和 『第3回共同研究校による合同研修資料』 2019
- ・金山 健一 『第1回共同研究校による合同研修資料』 2017
- ・國分康孝・國分久子（総編集） 『構成的グループエンカウンター事典』 2004
- ・国立教育政策研究所 『第Ⅲ期魅力ある学校づくり調査研究事業報告書』 2017